

鶴山書院報

第16号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原摩香内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦

孔子直系七十九代嫡孫・

孔垂長先生来訪



公益財団法人孔子の里
理事長 横尾 俊彦
(多久市長)

「人生を生きる際に最も大切にすべき教えをひとつだけ教えてください」。そう尋ねられた時、あなたはこう答えますか。

この問いを弟子から受けた孔子は「忠恕」と応えています。「忠」とは自らの良心に従順なこと、「恕」は「己の欲せざる処を人に施さない」心と実践です。そもそも「恕」とは、人を慈しみ、いたわることです。万人が恕を実践すれば、争いやいがみあいも減るでしょう。是非そうありたいと願うものではないでしょうか。

孔子の提唱した「恕」の貴さを提唱してこられたのが孔子直系第七十七代子孫の孔徳懋女士と第七十九代嫡孫孔垂長先生です。

垂長先生は今年の多久聖廟春季釈菜に参列され、釈菜儀式を廟内で御覧になりました。(取材会見内容も特集頁に掲載しています。)

人間学の基本を学び世に役立つ

孔垂長先生は台湾に在住され、孔子直系第七十九代子孫に決定した際は、当時北京在住の大伯母・孔徳懋先生との初顔合わせを多久市と公益財団法人孔子の里でサポートしました。鮮明に記憶しており、忘れ難い思い出です。

これまでも第七十七代嫡孫孔徳成先生の墓参りと台北孔子廟参詣に現地を訪問。徳成先生顕彰記念式典にも参列。さらに台北孔子廟での釋奠しきんに参列し、厚誼を重ねました。また日本でも論語研究で著名な伊與田覺先生百歳祝賀講演会で講話拝聴。思い出が光ります。

孔子の教えは悠久の歴史の荒波を越えて受け継がれ、人の本質を奥深く踏まえ、教えが発せられた時代を越えて現代に通じる教えです。まさに人間学の道標と言えます。その放つ灯りを一灯とし、たとえ眼前が闇であつても、闇を恐れず、一灯を頼んで、ひたむきに進み、お互いに活路を見出したいものです。

孔子生誕から二千五百七十五年の今年、曲阜の孔子廟でも記念の式典が行われます。孔子ゆかりの聖廟を擁する街として、私たちも初心・原点・初志を再興し、未来に向けて雄々しく、凜として歩み出したいものです。



「秋色に染まるころ」(福岡県 福原良一)
多久百景写真コンテスト入賞作品

令和6年春季釈菜(孔垂長氏来訪)

『石井鶴山先生遺稿』補遺

熊本大学 教授 中尾健一郎

佐賀大学 教授 中尾友香梨

多久と蓮池

佐賀県立九州陶磁文化館

芳野 貴典

龍造寺氏の勢力拡大における龍造寺長信の役割

佐賀県立図書館郷土資料調査・編さん課

野下 俊樹

西溪公園(にしのたに こうえん)

公益財団法人孔子の里理事

服部 政昭

多久家文書『水江事略』(翻刻文) 紹介14

公益財団法人孔子の里理事

服部 政昭

華表を仰ぐ(第三回)

多久市郷土資料館長

藤井 伸幸

2

6

8

10

12

20

22

令和6年 春季釈菜 孔子直系第79代嫡孫 孔垂長氏来訪

今年の春季釈菜に合わせ、孔子直系第七十九代嫡孫である孔垂長氏が呉碩因夫人、至聖孔子基金会の陳泰旭執行長、張哲顧問とともに多久市にご来訪されました。

4月17日、多久市役所において孔垂長氏歓迎セレモニーが開催され、横尾俊彦市長や野北悟市議会議長をはじめ多くの職員の歓迎を受けられました。夕刻は天山多久温泉T.A.Q.U.Aでの歓迎レセプションに参加されました。

翌18日は、孔子生誕から2575年目にあたる年の多久聖廟春季釈菜に光華を添えていただきました。孔垂長氏は、廟内で釈菜の式典内容を熱心にご覧になり、地元の子どもたちによる「釈菜の舞」や「参列生徒の唱歌」、「孔子の里腰鼓」も鑑賞されました。

多久聖廟前での参列者へのご挨拶や報道取材では「多久の地で三百年を超えて先祖孔子を讃える釈菜が継続されていることに感動しました」のお言葉から始まり、人間としての自己練磨や徳性の涵養の大切さ、各々に文化や歴史を相互に重んじ新たな歴史の繁栄を期すべきこと、次代を担う世代へこれら大切な教えを繋ぐことが極めて重要であるなどのお話をいただきました。孔子の教えが現代を生

きる私達にも大事な教訓であり、人生を拓く力になることを改めて感じました。過去には、ご祖父様の第七十七代嫡孫孔徳成氏やその姉君の孔徳懋女史も来訪されており、久々の直系子孫の参詣に廟内の孔子像もさぞご歓喜だったことと思われる慶賀のひとつ

ときになりました。

孔垂長氏は、釈菜を丹念にご観覧の後、多久市郷土資料館も訪問されました。同館では、多久茂文公の聖廟創建の立志を記した『文廟記』に関する藤井伸幸館長の説明に格別な関心を示され、中国や台湾の古書漢籍も収蔵する廟山文庫にも感銘されました。

これからも、孔家との御縁を末長く大切に紡ぎつつ、重要文化財「多久聖廟」及びその周辺の歴史・環境の保全と文教の地に適した学芸・文化の継承に努めてまいります。



▶ 釈菜式典



▶ 参列生徒の唱歌



▶ 孔子の里腰鼓



▶ 釈菜の舞

孔垂長氏 春季釈菜での祝辞

今回の多久市への訪問に際しては、横尾市長をはじめ、来賓の皆様、多久市友人の皆様にご挨拶申し上げます。

北京で横尾市長に初めてお会いして十年以上が経ちます。この間、市長の度重なる温かいご招待のおかげをもちまして、本日ようやく多久市を訪ねることができ、祖父の足跡をたどる機会を得ることができました。祖父の孔徳成先生と大伯母の孔徳懋女史も、多久聖廟の盛大な式典を見学できたことと感しております。

多久市の孔子廟では、三百年以上にわたり、毎年春と秋に「釈菜」が行われていると聞いています。祖先である孔子とその弟子を祀り、民間でも論語を学び、その文化を継承されている事に対し、深く敬服し、心から敬意を表します。

現代社会は、物質文明が高度に発達する一方で、精神的な荒廃、道徳の低下、様々な問題を引き起こしています。孔子の教えは現代社会に依然として大きな意義をもち、文明がどれほど発達しても、テクノロジー

がいかに進歩しても、私たちは基本的な倫理と道徳、信念と価値観を維持する事が必要です。

多久市は、孔子釈菜を三百年以上にわたって守り続けています。こうした姿勢は、その精神を体現している貴重なことだと思います。

最後になりますが、多久市の文化が日本及び世界に益々広がることをご祈念いたしますとともに、改めて御礼を申し上げます。



孔垂長氏

吳碩因令夫人



孔垂長氏 報道取材(一問一答)

Q 多久聖廟の釈業に参列し、遠く離れた日本・佐賀で、孔子の遺徳が偲ばれていることについてどう思われますか。

孔垂長氏

私は、この度初めて多久聖廟を訪れました。台湾から千キロ以上も離れた場所です、このような歴史的で大規模な孔子廟を見ることができたことはとても素晴らしいことです。多久市民は孔子廟を大切にし、論語を学ぶことを重要と捉えています。また、この釈業は長い間多久市民により保存されてきました。孔子の文化が継承されていることに深く敬服し、心から敬意を表します。

今日、多久聖廟に来てみると、孔子廟だけでなく、建物を含む周辺の環境が一体として保存されています。多久聖廟に一步足を踏み入れれば、まさに心が浄化されるような雰囲気を感じられます。これは儒学文化の魅力だけではなく、市民と行政の力によるものです。多くの市民が共に学問を学ぶ者であり、市民らが協力してこの環境を築いていることに、私は心から感動しています。

Q 孔子様を讃え、感謝する釈業が多久市で三百年以上続けられていることをどう思いますか。

孔垂長氏

伝統文化を継続していくバトンは、次世代に譲ることになります。私はこれまで数多くの伝統文化活動に参加してきましたが、共通して言えるのは、参加する年齢層が比較的高いということだと思います。私はこの活動を通して、子どもたちには地域の人々がいかにしてこれらの文化を守るために最善を尽くしてきたかということ

を学んでほしいと思います。また、その事を学ぶことで、勉強や将来の仕事に大いに役立ててほしいと思います。この学びは、これからの人生において、とても良い助けになってくれると思います。

Q 釈業以外にも、曲阜市から導入された『釈業の舞』や『孔子の里腰鼓』などもご覧いただきました。多久の子どもたちに向けて何かメッセージをいただけないでしょうか。

孔垂長氏

私は、子どもたちに感謝したいと思います。伝統的な衣装を着て演目を披露していただいた多久の子どもたちに、心からの感謝の意を表したいと思います。それと同時に、子どもたちにはこの演技を通じて、その伝統文化について学び、彼らの祖先から受け継がれてきた大切な文化であることを理解してもらいたいと願っています。

さらに将来的には、このとても美しい伝統文化はもちろんですが、多久聖廟周辺の環境全体も次の世代、

さらに次の世代に引き継いで欲しいと思います。

Q 多久市の文化ともいえる釈業は、今後どのようなようになって欲しいと思われませんか。

孔垂長氏

釈業という文化が、多久の人々に広く受け入れられていると感じます。この文化が今日まで受け継がれてきたことには必ず理由があると思います。日本の伝統文化でも、儒学文化であっても、それぞれが優れた文化であれば、それを組み合わせ、双方が力を合わせることで、より良い文化を作ることができます。ぜひ、そうあって欲しいと思います。

Q 孔子様の数多くの教えのうち、特に今の人たちに伝えたい言葉はなんでしょうか。

孔垂長氏

私が住む台湾から遠く離れた多久市において、三百年以上もの間、この孔子の祭典が維持されてきました。これは、儒学を研究する私たちにとって、とても感動的なことなのです。

多久聖廟には、大伯母(孔德懋女史)が書いた論語の章句の碑が建立されています。『徳は孤ならず、必ず鄰あり』です。大事なことは、まず自分自身を省みることだということを伝えたいと思います。

Q この式典に来て、孔子の儒学が日本に広まっていることをどのよう

に感じていますか。

孔垂長氏

私の祖先である孔子の『論語』にはたくさんのお教えがありますが、一番大切なのは仁愛の心を持つことだと思えます。その心があれば、他者を理解し、共感することができると思えます。何事も自己中心的な考えではなく、すべては常に他者のために行うべきです。この孔子の教えには重要な意味があると思います。

特に最近では自然災害が多く発生しています。日本や中国、台湾に住む私たちは儒学を学んでいます。儒学を学んだ者は慈悲の心を持っています。それぞれが、できる範囲内で、最も重要な援助を隣人に提供できるように最善を尽くしてほしいと思います。





多久聖廟を案内



多久聖廟 多久茂文像前



奉奠式典

中国曲阜市
寄贈の孔子像・
孔徳懋女史
記念の論語碑前



廟内より
子どもたちの
演技をご鑑賞



多久市役所での歓迎



日中友好協会の皆さんと共に記念撮影



多久市郷土資料館で廟山文庫の説明

歓迎レセプションで多久市へ寄贈された孔子系譜図とともに

『石井鶴山先生遺稿』補遺

— 京都時代の佚詩 —

熊本大学 教授

中尾健一郎

佐賀大学 教授

中尾友香梨

石井鶴山（一七四四〜一七九〇）、名は有、字は仲車、鶴山は号、多久の人。草場佩川より一世代前の人物である。

佐賀藩八代藩主鍋島治茂の侍読に抜擢され、のち寛政三博士の一人となる古賀精里とともに、藩校弘道館の運営にもあたった。

遺稿として『鶴山遺稿』『鶴山詩集』などがあり、散佚した作品も収集して、二〇二一年に『石井鶴山先生遺稿』を世に出した。収録作品は869篇にのぼる。

その後、佐竹諭々編『米汁沽噺』（安永四年（一七五五）刊）に、鶴山の詩が一首収められていることが、新たにわかった。本稿では新しく見つかったこの詩について紹介する。

明和九年（一七七二）、二十九歳になった鶴山は、多久の東原精舎（のちの東原庵舎）の教官の職を辞し、京都にのぼった。遊学のためである。

古文辞派の高葛陂の門に入り、安永二年（一七七三）秋まで一年余をそこで学んだ。しかしその間の動静を伝える作品は少ない。そうした中で、新しく見つかった本作は、京都時代の鶴山の消息を伝える貴重な一首となる。

佐竹諭々（一七三八〜一七九〇）は京都の人。池大雅に師事して書画にすぐれ、篆刻にも長じた。風流人向けに「竹酔館」という酒屋を営み、売茶翁に倣って、春と秋には酒器を担いで東山、伏見、嵐山あたりで酒を売り歩いた。世間からは「売酒郎」と称された。

『米汁沽噺』は噺々のそのような生き方を「奇」とする、文人騷客らの詩文を一冊にまとめたものである。最盛期を迎えた京坂詩壇の盛況と、それを支える個性豊かな人物たちの詩酒優遊を伝える恰好の一冊となっている。

以下、『米汁沽噺』に収められた鶴山の五言古詩を、三段に分けて紹介しよう。

初春過飲竹酔館

初春、竹酔館に過りて飲む

- 1 唯有壺中趣 唯だ壺中の趣有るのみ
- 2 恒居顔自配 恒居して顔自ら配うもの
- 3 十千人拳白 十千に人は白を拳げ
- 4 歲月鬢難暗 歲月にも鬢は暗くなり難し
- 5 結屋隣華頂 屋を結びて華頂に隣し
- 6 携罇尋稻阿 罇を携えて稻阿を尋ぬ
- 7 安妨麴作枕 安くんぞ妨げん 麴もて枕と作すを
- 8 況復酒如河 況んや復た酒の河の如きをや

壺中の酒の情趣こそが、いつも楽しい酔い心地にしてくれる。名酒のために人々は盃を拳げ、流れる歲月にも鬢は白くなり難い。噺々道人は華頂山知恩院（浄土宗の総本山）の隣に酒屋を構え、酒器を携えて伏見稻荷あたりで酒を売り歩く。竹林の七賢の一人である劉伶が麴を枕にし、中行穆子が酒を川にたとえた風流が、ここにはある。

「十千」は「一万」。李白の「将進酒」に、「斗酒十千 飲讎を恣にす」とある。一万銭の値がつくほど貴重な酒、つまり名酒をいう。「麴作枕」は劉伶

の「酒徳頌」に、「麴を枕とし、糟を藉とす」とあるのをふまえる。「酒如河」は「春秋左氏伝」昭公十二年に晋侯が齊侯をもてなす場面で、穆子が「酒有り准の如く、肉有り坻の如し」と歌ったのにもとづく。「准」は淮水（川の名）、「坻」は坻山（山の名）である。

- 9 銀甕對山雪 銀甕 山雪に對し
- 10 青糸掛女蘿 青糸（柳枝）女蘿に掛かる
- 11 晚風吹竹葉 晚風 竹葉に吹き
- 12 夜月泛金波 夜月 金波に泛がぶ
- 13 下物芸編足 下物（酒の肴）の芸編足り
- 14 高陽損客過 高陽の損客過る
- 15 侑杯黃鳥至 杯を侑むる黃鳥至り
- 16 銜素枯魚多 素を銜む枯魚多し

銀の甕は山の雪と好一對をなし、柳の枝が酒屋の日除け傘に垂れ掛かる。夕暮れの風が盃の酒を揺らし、空に上った月がそこに映る。酒の肴には学芸の書が有れば事足り、飲み仲間たちはかしこまった挨拶などそつちのけで立ち寄る。酒を美味しく飲ませてもらえる鶯が飛んできて囀り、縄でつないだ干し魚も充分にある。

「銀甕」は酒甕。「女蘿」はサルオガセ、別名「日蔭の葛」、略して「日蔭」ともいう。ここでは露店の日除け傘（日蔭）をしゃれていうか。「竹葉」は酒の別名。「金波」も月光に反射する酒をいう。

噺々の露店の品書きには、「下酒（酒の肴）」として「漢書」「枯魚」「黃鳥一声」が記されていた（本稿末尾の図を参照）。第13・15・16句はこれをいう。「黃鳥」は鶯。

「高陽」は中国の地名。儒者の酈食其は、秦に反旗を翻した劉邦に仕えるため面会を求めたが、儒者嫌いの劉邦に無礼な態度をとられたので、長揖（手をこまねいて会釈）するだけで拝礼はせず、自分は

「高陽の酒徒」であると名乗った。第14句はこの故事を用いて、形式にとられない店主と客の交わりをいう。

17 七竅は星斗に願まれ

18 独醒笑汨瀾

19 援毫仍頌徳

20 擊筑漫裁歌

21 不飲宛其逝

22 栖栖欲奈何

殷の紂王に諫言して無残にも殺され、心臓まで取り出された比干は、同じく殷王朝に仕えて死後に星となった傳説に憐れまれた。衆人がみな酔っている中で、独り醒めていた屈原は、汨瀾(川の名)のほとりで漁夫に笑われた。

劉伶は世間の批判を浴びながらも、酒の徳を称える「酒徳頌」を著した。始皇帝暗殺に赴く荆軻を見送る宴では、友人の高漸離が筑(楽器名)を奏で、荆軻が「風蕭蕭として 易水寒く、壮士 一たび去れば 復た還らず」と歌った。

酒も飲まず名声を追い求めても、人間はいずれ死ぬ。齷齪と暮らしても、結局何も残らないのである。

「七竅」は立派な人の心にあるとされる七つの穴。紂(殷王朝第三十代王)の一族である比干は、「臣下たる者は命をかけて諫言しなければならぬ」としてその暴虐を諫めたが、紂王は「立派な人の心には七つの穴があるようだ。それを見たい」と言つて、比干を殺し、その心臓を取り出させた。

一方、同じく殷に仕えた傳説は、主君の武丁(第二十二代王)から諫言を求められ、「説命」を著した。そのような傳説を、武丁は酒や醴を作るのに欠かせない麴のような存在であると評した。傳説は死後、星となったとされる。

同じく忠臣であつても、処世の姿勢が異なり、そ

の結果、最期も異なることを、鶴山は指摘している。第18句はいうまでもなく「楚辞」の「漁父辞」をふまえる。憔悴しながら、「世を挙げて皆な濁り、我ひとり清めり」衆人皆な酔い、我独り醒めたり「安くぞ能く皓々の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」などという屈原に対して、漁夫は「つこりと笑い、滄浪の水清まば、吾が纓(冠の紐)を濯うべし。滄浪の水濁らば 吾が足を濯うべし」と歌いながら去つていった。

第19句は、劉伶の「酒徳頌」をふまえる。儒学の礼教を重んじる人たちから、齒ぎしりするほどの憎しみを買いながらも、劉伶はなお酒の徳を称えた。

第20句は、李白「少年行」の「筑を撃ちて美酒を飲み、劍歌す 易水の湄」をふまえる。易水のひとつで荆軻を見送る、悲壮な送別の場面を描く。

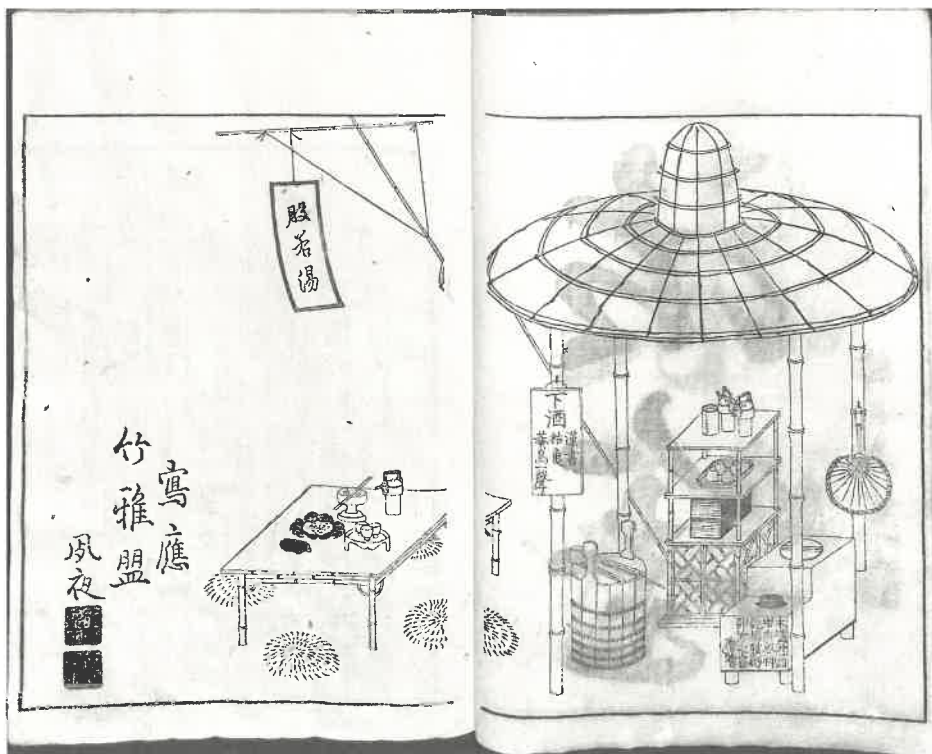
第21・22句は、「詩経」唐風「山有枢」の「死として其れ死せば、他人室に入らん」をふまえる。多くの財物を所有しても、死んでしまえばすべては他人の物となつてしまふ意。「栖栖」は忙しいさま。

以上をまとめると、「初春過飲竹醉館」詩には、老荘思想が多分に示されている。それは鶴山の辞世の詩とも相通じている。

『米汁沽陰』は鶴山の師、高葛陂が序文を著し、鶴山と同門の倉成龍渚(のち中津藩儒)、伊形靈

雨(のち熊本藩儒)、萩野元凱(のち朝廷の御典医)らも詩を寄せている。佐竹噲々と高葛陂一門の交流を示唆する一冊でもある。

謝辞 斎田作楽氏より、同氏発行の『米汁沽陰』(太平書屋、一九九六年)をご恵与いただき、同集に鶴山の詩が収められていることをご教示いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。



佐竹噲々の露店 (『米汁沽陰』口絵)
西宮市「にしのみやデジタルアーカイブ」より
https://archives.nishi.or.jp/05_content-viewer.php?mkey=21530

多久と蓮池

鍋島雲叟から東原庵舎への贈り物

佐賀県立九州陶磁文化館

芳野 貴典

嘉永六年(一八五三)五月十二日、草場船山は父佩川とともに佐賀蓮池に遊んだ。当時すでに隠居していた八代蓮池藩主鍋島雲叟(直与)に拝謁。歓談は弾んだと見えて、その日の宿である藩儒水野豹齋の屋敷へ戻ったのは夜も更けてからであった。翌日、父子は再び雲叟のもとを訪れ、彼が退隠後に造った庭園「天賜園」で酒を振舞われた。その時、雲叟から一つの申し出があった。清の書家、呉涵の一幅を多久の東原庵舎に寄贈したいというものである。船山は書幅を預り、蓮池藩親類家老の鍋島主計邸で開かれた詩会に参加した後、深更に及んで佐賀城下の屋敷へ帰り着いた。翌朝早く佐賀城内の多久屋敷に書幅を持参したところ、御前に召され、臣主多久茂族から受贈の内意が示された。そのことは用人を通じて学校にも伝えられた。「草場船山日記」に書き留められた出来事である。

雲叟が佩川・船山父子を介して東原庵舎に寄贈した呉涵の書は、その後聖廟に伝来し、現在は多久市郷土資料館に所蔵されている(写真1参照)。書かれているのは『朱子文集』卷三〇「答汪尚書七」の一節「夫道固有非言語臆度所及者、然非顔曾以上幾於化者、不能与也、今日為学用力之初、正当学問思弁而力行之、乃可以變化氣質而入於道」である。縦九八・三×横四七・〇の絹本に呉涵が得意としたという行書体で墨書されている。落款には「国子監

司業呉涵」の署名があり、引首印「東方歲星」、落款印「呉涵字曰匪庵」・「文学侍従之臣」が押されている。表具裂は古いものであり、軸端は輪宝文を染付で描いた磁器製で三川内など肥前の産かと思われる。箱書には「呉涵行書鑒誠壁幅嘉永癸丑之春蓮池老侯所寄附(写真2)」とあり、紛うかたなく船山日記に出てきた一品であることを示している。もともと軸を収納していた布製の袋が伴い、これには隸書体で「呉涵行書鑒誠鳴琴堂藏」(写真3)と墨書した絹布が縫い付けられている。鳴琴堂は雲叟の号の一つである。

幕末随一の中国書画研究家で、浦賀奉行や江戸北町奉行を歴任した旗本の浅野長祚は自著『漱芳閣書画銘心録』(安政三年(一八五六))で雲叟所蔵の書画を紹介、論評している。その中で本作について「筆の運びは美しく整っており、思うに唐の柳公権に学んだのであろう」と評している。浅野は若い時から雲叟と親交があり、当時の紳縉中で第一の好古家と認める雲叟の所蔵品をほとんどすべて実見していた(『墨華塾書画銘心録』)。浅野以外にも江戸や京都に文事を通じて雲叟と交流を持った文人墨客は数多くいたことから、本作が当時中国書画愛好家の間で知られた作品であった可能性はある。

雲叟は蓮池藩史上特に名君との呼び声が高い藩主である。本藩八代鍋島治茂の七男として生まれ、いつ

たんは神代家の養子となるが七代蓮池藩主鍋島直温の養子であった兄が廢嫡されたのを機に蓮池鍋島家に入り、直温隠居後に家督を継いだ。財政改革を進め、文武の奨励や大砲製造を含む科学技術の振興を図った一方、詩書画、和歌、音楽に秀でて著述も多数に上る文人大名であった。その才覚は幕閣も認めるところであり、天保期には老中真田幸貫の推薦で寺社奉行就任への打診があったほどだ。甥の鍋島直正にとつては分家筋でありながら最も身近にいる優れた治者の先達であったことから、少なからず助言や示唆を得たことが推察される。「鍋島直正公伝」における「何事にも達したる人」、「柳間大名中より敬意を払はれたる人物」、「峻厳なる学者氣質」、「柳間大名中に屈指の偉才」、「屈強なる叔父」などの雲叟評がそれをうかがわせる。

多久との関わりとしては、佩川・船山父子との親交が深く、多久や蓮池、時に江戸藩邸の間での往来は頻繁であった。詩文の交歓はもちろん、書籍の貸借や旬の野菜(女山大根等)・土産物(カステラ等)の贈答がたびたび行われた。親類同格の多久と支藩の蓮池は政治上の接点はほとんどないが、藩内一流の学者父子と英邁な藩主とは、それぞれが多芸多才なこともあって、さぞかし話が通じたと思われる。

さて、呉涵書の一文を現代語訳すると「道には言語や憶測の及ばない所があるでしょう。しかし、それは、顔子や曾子のような「化」のレベルに近いものでなければ、与り知ることはできません。今学問修養に努力しようという当初に於いては、とにもかくにも学問思弁し、又それを実践するよう努めるべきです。そうすれば、氣質を変化して、道を悟ること

とができるのです」「垣内、一九九三・一二四」というものだ。真理には言語化できない領域や思考で捉えられない部分があるものの、その域に到達できるのは孔子の弟子たちくらいのもので、初学の者はひたすら学び考えなくてはならないと述べている。東原摩舎で日夜学問に励む学生たちに贈る言葉としてうってつけであろう。

現在、雲叟の中国書画コレクションを含め蓮池鍋島家に蔵されていた書画はすっかり散佚し、ほとんどが所在不明である。それゆえに雲叟が多久の学徒たちへの激励を込めて東原摩舎に贈った由緒を持ち、今日でも多久に伝存する本作は極めて貴重である。

付記 吳涵書幅の調査にあたり多久市郷土資料館学芸員の志佐喜栄氏に御高配を賜りました。心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・垣内景子、一九九三、『朱子文集』訳註(一)、アジアの文化と思想の会編『論叢アジアの文化と思想』
- ・近藤元粹編、一九一三、『支那書画名家詳伝』一二二
- ・多久市立図書館、一九六八、『聖廟附属資料目録』
- ・田村悦子、一九八四、『研究資料 梅堂浅野長祚自筆稿本』墨華塾書画銘心録・墨華塾本朝書画銘心録『公刊』、『美術研究』三三三〇
- ・田村悦子、一九八五、『浅野梅堂自筆稿本』墨華塾書画銘心録・墨華塾本朝書画銘心録の研究、『美術研究』三三三一
- ・三好嘉子校註、一九九七、『草場船山日記』、文献出版

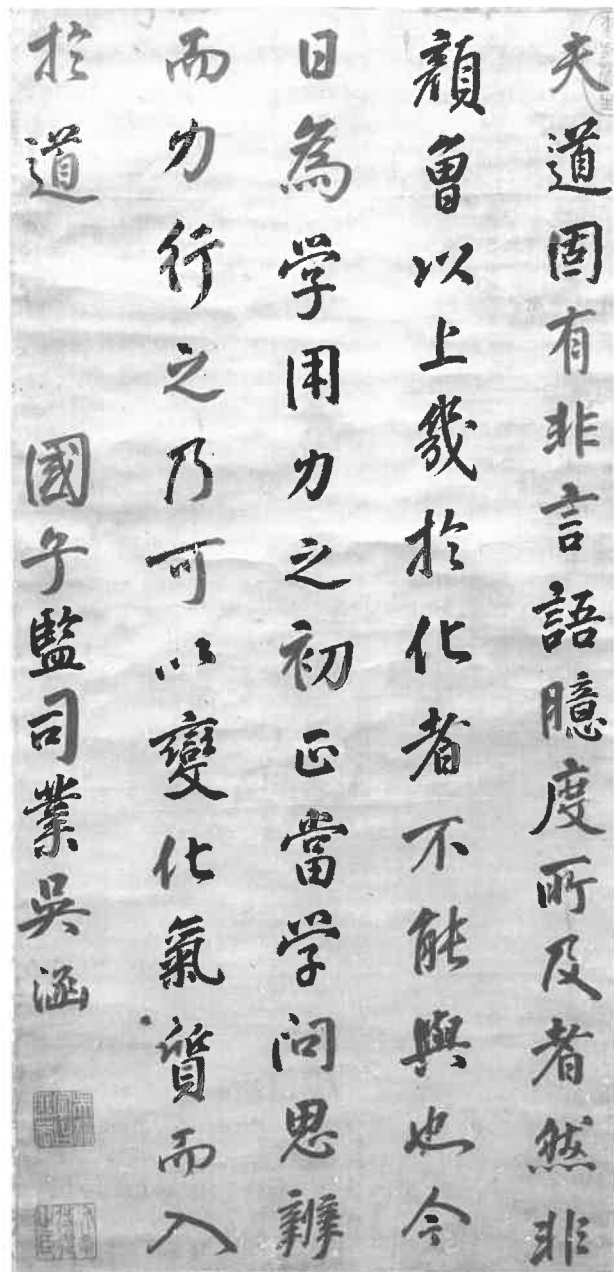


写真1 吳涵書 朱熹「答汪尚書七」多久市郷土資料館所蔵



写真2 箱書 同右



写真3 「鳴琴堂藏」と記した絹布 同右

龍造寺氏の勢力拡大における龍造寺長信の役割

佐賀県立図書館 郷土資料調査・編さん課 野下 俊樹

龍造寺隆信は、戦国時代の九州において豊後大友氏や薩摩島津氏と覇を競った人物である。天文十七年、龍造寺胤栄の死去により家督を相続した隆信は、

神仏に誓いを立てる「起請文」を用いて近隣領主と関係を結んだほか、隆信の弟龍造寺長信をはじめ後藤家信や江上家種、鍋島直茂ら一族・一門を交通上の要衝に配し、さらには大友氏や毛利氏、島津氏ら大名権力の後ろ盾を得る(得ようとする)ことで外交・合戦を優位に進め、急速に勢力を拡大した。

こうした龍造寺氏の活動を支えた人物としては鍋島直茂が著名だが、それに劣らず重要な役割を果たしたのが龍造寺長信である。龍造寺氏に関する史料の中には、隆信・長信との間で交わされた文書が多く存在する。それらは「多久家文書」や「多久家書物」^{【史料①】}「多久家之候御書物写」等に収められており、一部は『佐賀県史料集成』八〜十巻に収録されている。かかる史料をもとに、長信が、城や街道整備に用いる材木や鉄砲火薬に用いる硝灰石などの物資調達及び松浦地方の抑えといった軍事的役割を担っていたことが明らかにされている。また、近年では「多久家文書」の読みなおしをとおして、歴史像の精緻化を図る共同研究が行われ、その成果は「『多久家文書』の読みなおし」として刊行されている。長信の位置づけは着実に示されつつある。

小稿では、諸先学に導かれながら、隆信の勢力拡大における長信の重要性を紹介する。

なお、以下に掲げる史料末尾の数字は、『佐賀県史料集成』十巻の文書番号である。

隆信と長信の私的交流

第一に、隆信と長信との私的な交流をみると、例えば次の史料がある。

【史料①】龍造寺隆信書状(「多久家書物一」七八)

又、彼酒丹後入道林山え茶碗一ツ宛のませられへく候、二ツとは無用にて候、をかしく候、

近日は無篇目故、無音之様二候、当時其堺無事之由、目出度候、仍一昨日江嶋罷登候処二、其元徒然さう二承及候間、雖無差越候、飛脚遣候、仍其方子共兩人江、雖未熟候、瓜籠一ツ数四ツ遣候、未熟候間、瓜も三共二て可然候哉、又其方所え此方之夏酒大瓶一羽まいらせ候、茄子籠一數八ツまいらせ候、此方珍候物二て候、其許八いかくく、又一種まいらせ候、賞罰候へく候、恐々謹言、

五ノ十一

信判

長信まいる

申給へ

本文書は、隆信が江嶋城に滞在していたところ、長信が「徒然さう」(退屈そう)だと聞き、長信や子息(多久安順か)のために、瓜や夏酒、茄子を贈ったことなどを伝えたものである。熟れていない瓜は、

「瓜もみ」にして食べると良い、とのアドバイスや丹後入道林山なる人物には夏酒を「茶碗一ツ宛」飲ませ、「二ツ」は無用との冗談交じりのコメントを添えており、両者の良好な関係を垣間見ることができさる。

長信による物資調達と境目の管理

さて、話を隆信の勢力拡大における長信の役割に移そう。先学が指摘するように隆信は長信に対して物資や人手の調達を多く依頼している。いくつか例を挙げれば、「障子はり」や「なわ」、「材木」、「塩硝薪」、「香蘇散」(鎮痛・解熱効果のある漢方)などである(「多久家書物」など)。また、街道の整備や隆信の居城となる須古城の普請についても長信の協力を求めている。一例を挙げると、

【史料②】龍造寺隆信書状(「多久家文書」六〇四)

從其元「一」嶋寄之領内、人馬之道、可被作候、又志久・八戸米地下人、早々被召直候て、可「一」彼村統路次、是又人馬轅往返候様、道之儀可被仰付候、不可有油断候、随而貴書状遣候、從「一」飛脚可被差遣候、返事到来候者、可持せ給候、恐々謹言、

八月廿九日

信(花押)

(奥封上書)

一

和泉守殿

山城守

隆信

申給へ

【史料②】は、隆信が長信に宛てて、人馬が容易

に往来できるようにするため、志久・八戸米（焼米）の地下人（領民）を動員し路次を整備しよう命じたものである。隆信が長信に宛てた文書を整理すると、長信の活動範囲は佐賀平野から松浦地方に抜ける大河野周辺のほか、多久、志久、焼米、猪隈、大崎、横辺田（石原・佐留志・山口・小田・大町）にわたっており、佐賀郡と杵島・藤津郡の間を面的に管轄していたようだ。

このことから想起されるのは、鍋島勝茂の年譜『勝茂公譜考補』（『佐賀県近世史料』第一編第二巻）に記される「牛津川ヨリ西ノ儀ハ、鍋島鎧先ヲ以切取ノ地ニテ御座候」という記述である。龍造寺氏の受発給文書にみえる隆信以前の龍造寺氏の勢力範囲は、小城郡多久別府を西限とする（『龍造寺家文書』）。長信の管轄地域はまさに龍造寺隆信が少弐氏や平井氏、後藤氏を平定するなかで、実力によって勝ち取った地域であった。

長信による当該地域の管理は、龍造寺氏による軍事的・経済的流通経路の掌握を意味した。「多久家書物」には、隆信が長信のおこなった「堺日」（横辺田周辺）の「荷留め」を妥当な措置であると連絡した文書が存在する。「荷留め」とは、物資の移出入を禁止する行為である。さきの街道整備とともに龍造寺氏が陸路の管理を重視していた様子がかがえる。また、その意義は当該地域の管理のほかに、隆信の更なる肥前西部進出においても重要な意味を持っていた。

【史料③】龍造寺隆信書状（「多久家書物一」六〇）

返々伊佐早番詰廿日之覚悟、可被仰付候、
為御存知候、又様躰飛驒守可有談合候、

伊佐早番手之儀、明後日四日可被差下候、海上者船無御座候間、陸地可被仰付候、不可有油断候、又一昨日冬石口二て、敵共七人討捕候、其外村々無残所焼払候、吉左右之条、為御存知申候、恐々謹言、
卯月二日
隆信判

長信参

申給へ

本文書は、隆信が、伊佐早番手の派遣に関して海路は船がないため陸路での移動を指示する予定であるから油断しないよう伝えたものである。龍造寺氏の本拠佐賀と肥前西部をつなぐ街道を管轄する長信の役割の重要性は龍造寺氏が肥前西部へと進出するなかで、より一層高まったものと推察される。最後に、次の文書から長信の位置づけを考えてみたい。

【史料④】龍造寺隆信書状（「多久家書物一」五七）

就今日出張、預飛脚候、畏入候、彼使如見申候、近日者至市河山着陣候、明日草野程近可取寄候、同四日、草野里城可取崩候、吉左右、自是可申候、其表相替儀候者、可示給候、又東日之義、氣仕有間敷候、相当手当申付候、為御存知候、恐々謹言、
正月二日
隆信判

長信まいる

申給へ

【史料⑤】龍造寺隆信書状（「多久家書物一」七一）

如仰、近日者無題目候故、無音之様候、今程其

堺無事候哉、日出候、此表無何事候、可御心安候、仍猪肢被懸御意候、珍物一入賞翫無他候、恐々謹言、
九ノ十一
隆信判

長信まいる御返

申給へ

右に掲げた二通の文書には、「此表」「東日」と「其表」（其堺）という記述が登場する。隆信は肥前北部・東部に侵攻する中で、長信に肥前西部の管理をある程度委ねていたのである。この点に勢力拡大を続ける龍造寺氏に占める長信の重要性がかがえる。

小結

以上、雑駁ながら龍造寺長信の役割を紹介した。長信は隆信の勢力拡大において軍事活動はもとより物資調達や城普請や街道の整備など、多岐にわたる活動をみせた。隆信が肥前東部に侵攻する際には後方の備えとして、肥前西部を攻める際には最前線の要衝として重要な役割を果たしており、龍造寺隆信の勢力拡大における陰の立役者といえる。

【主要参考文献】

- 藤野保編『佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館、一九八一年）
- 鈴木敦子『戦国期の流通と地域社会』（同成社、二〇一一年）
- 中村知裕「龍造寺氏の肥前西部侵攻と龍造寺長信」『古文書研究』八三号、二〇一七年

西溪公園 (にしのに こうえん)

公益財団法人 孔子の里 理事 服部 政昭

西溪公園

大正時代に村立図書館と村立公会堂が建築された
多久梶峰城跡にある西溪(にしのに)公園は、肥
前随一の名園であると誇りに思っている。

ここを訪れる人たちは、歴史と緑の濃さ、清閑な
佇まいに足を止め、時を忘れられるようだ。公園と
してはさほど広くはないのだが、ほとんどの人は、
後ろに聳える山城跡やその周囲の一望できる緑のす
べてが公園の一部であると思いついでられる。

鎌倉期の前多久家

多久梶峰城は、建久四年(一一九三)、鎌倉幕府
の御家人津久井太郎宗直(多久と改姓・前多久家の
始祖)が築城したとされる。

その後、天文十三年(一五四四)、龍造寺周家が
多久上野守宗利を破り、上野守宗利は南へ敗走する
が、上野守を支援する有馬勢との攻防は続く。

永祿五年(一五六

二)、龍造寺隆信が、

小城町三里の丹坂峠
の戦いで多久・有馬
の連合軍を打ち破り、

鎌倉時代から四百年
にわたり多久地方を
支配した多久太郎宗
直を始祖とする多久



梶峰城跡

家(前多久家)の時代は終わる。龍造寺隆信は、弟・
龍造寺長信を多久の領主に据えて西肥前の備えとし
た。しかし、永祿十一年(一五六八)、豊後の大友
宗麟が筑後・肥前を征伐する為に府内の居城を出馬
すると、長信は蓮池城へ。梶峰城には蓮池城主であつ
た小田鎮光が所替えとなる。

元龜元年(一五七〇)の八月十九日から二十日の
未明に、龍造寺軍は夜襲をかけて敵将大友親貞を討
ち取り、和睦講和が成立し、大友宗麟は豊後への帰
国の途についた。

梶峰城に居るはずの小田鎮光が大友軍に寝返つた
のを知つた龍造寺隆信は、弟長信、鍋島信生、納富
但馬守等の家臣を多久梶峰城へ遣り、城番の江口右
馬助、内田治部少輔等から城中に捕らえられていた
鶴仁王丸母子を助けた。龍造寺長信は、この戦
いで多くの軍功をあげた。

移徙(わたまし)の儀・後多久家

兄・隆信は、弟・長信に多久の地を与え、梶峰城
主とした。水ヶ江龍造寺の記録『水江事略』には、
この日の事が詳細に記されている。ここでは、多久入
城の士卒の名前は紙面の都合上で省略するが、『多
久家諸家系図』には、全ての系図と氏名が残されて
いる。

元龜元年九月十五日公士卒五百餘人ヲ率ヒテ城ニ
入御移徙ノ儀式ヲ調ラル龍造寺下総守信種御後見ト



シテ是ニ従ハル先達テ屋敷ヲ城下ノ西ノ原ニ構ユ子孫今ニ是ヲ傳フ其日公ニ従テ入城スル所ノ士七十五人（以下、省略）。

老傳ニ云往昔龍家ノ元祖當國下向ノ時附従者七十
五士公先例ヲ追テ譜代新參ヲ分タス七十五士ヲ率
ユ。

其餘ノ輩ハ水江ニ留置レ月ヲ隔テス御呼寄セナリ
後日参候シテ多久ニ居住スル輩ニハ（以下、省略）。
我公梶峰在城ノ時ヨリ當家ニ属スル輩ニハ（以下、
省略）。

水ヶ江城（現在の佐賀市城内赤松小学校付近）か
ら、士卒合わせて五百人余りが多久西の原に移って

来て、屋敷を構えて城下町を築いている。

若宮八幡神社の南西側には、龍造寺和泉守長信公
御館が構えられ、長信公御館の南側には、芳岩妙春
夫人（長信公夫人）屋敷が設けられている。

長信公御館の西側には、龍造寺下総守信種公（後
の康房）屋敷が築かれた。

（この通りにある「御屋形広場」には、当時の町
割と屋敷の配置が判るように絵図を陶板に書き写し
て展示をしている。）

慶長二十年（一六一五）、江戸幕府による一国一城
令により、梶峰城は廃城となり、領主は佐賀鍋島家
の親戚同格として扱われ、佐賀市城内の多久屋敷に



高取翁の銅像と下総の松

居住し、多久梶峰の城下町には家臣たちが居住した。

高取伊好の褒章叙勲

高取伊好は、多久家の家臣鶴田十兵衛斌の三男と
して多久城下西の原に生まれ、郷校東原精舎に学
び、九歳の時に姉の嫁ぎ先である高取厚の養嗣子と
なり、佐賀藩校弘道館で国学、漢学を学んでいる。

明治四年（一八七二）上京し、慶応義塾を卒業、
「鉞山寮」で採炭技術を学び、工部省に採用され高
島炭鉞に赴任。その後、独立して柚ノ木原炭鉞、杵
島炭鉞の事業に成功した。

明治四十四年（一九一）一月十一日に、「緑綬
褒章」を受章し、大正九年（一九二〇）四月十六日



高取翁の銅像と西溪公園

には「紺綬褒賞」を受章している。

壽像園建設計画

大正九年六月、高取伊好翁の偉業を後世に広く伝える為に、「杵島炭鉱内及び多久村役場内には「高取翁壽像建設委員会」が設けられ、小城郡多久村字魚町野口方に「高取翁壽像園建築事務所」が設置された。

多久の村民及び縁故の者が相謀り高取翁の等身大の壽像を鑄造して、多久村西の原西の溪、女山屋敷跡。龍造寺下総康房が多久入城時に植えた下総の松の前に「壽像園」が計画された。

話は前後するが、昭和六十二年から多久市役所主導で、「多久聖廟周辺整備計画策定協議会」が設置



下総の松の切株



高取伊好翁の壽像

されて私も委員として参加をしていた。ある日、事務局をされていた企画課長の最所和泉氏より、目を通しておく様にと分厚い茶封筒が家に届けられた。なかには『多久坑主壽像園築造記図書館、公會堂建設二関スル往復書類』、筆で書かれた手紙・葉書、高取翁の履歴書草稿。高取鉱業株式会社定款。小城郡各村寄附者名簿。北方村其外寄附者名簿、他の複写資料が入っていた。その多くが筆書きの書簡であり、私が読み解くには難解な資料であった。

高取翁壽像の原作者

そのなかに壽像の鑄金家についての書簡があった。「東京市京橋區銀座二丁目十三番地の合資會社北方商會差し出しの『岡崎雪聲氏経歴』と『渡邊長男氏経歴』二名の経歴書と、もう一通の手紙には、

拜啓六月四日附御手紙ニテ岡崎雪聲氏ノ経歴ヲ取調べ通知致ス様御申越ニ接シ候処坑主殿ノ御銅像ハ最初渡辺長男氏(岡崎氏ノ娘婿)ガ原型ヲ作ラレ夫レニ依リテ岡崎氏が鑄造ラレタルモノニ有之候ニ付御参考トシテ

別紙ノ通り両氏ノ経歴ヲ二六新報社発行ノ大正名人録中ヨリ抜粹致シ貴覽ニ供セシ候猶ホ右ノ分近來英名ノ大作トシテ

明治天皇陛下ノ御銅像ハ渡辺氏原型ヲ作ラレ岡崎氏鑄造セラレタル由ニ御座候岡崎氏ハ不幸ニシテ本年四月十六日病没セラレ候ニ付御合点被不

義願上候

先ハ当用之申上候

敬具

大正十年六月十一日

と書かれた書簡であった。これにより、高取翁の壽像の原作者は渡邊長男氏・铸造者は岡崎雪聲氏である事が判明した。共にわが国を代表する彫像家であり、渡邊長男（わたなべおさお）は、明治天皇の銅像の製作や、東京日本橋の欄干、「獅子・麒麟像」の彫刻で著名な人だった。

今、わが国の道路の起点である日本橋。その上空を塞いでいた高速道路の地下移転プロジェクトが計画され、数年後には大空の広がる日本橋になる。

その欄干を飾る彫塑家渡邊長男の麒麟と獅子のブロンズ像が注目を集めるだろう。高取翁の壽像も同じ作者のブロンズ像だった。

高取翁壽像序幕式

龍造寺下総守康房が元龜元年（一五七〇）にこの地に入城した時に植えた松は、植後三五〇年を経て大木に育ち、下総の松の前に建てられた高取翁壽像の序幕式は大正九年十二月十二日に挙行された。

銅像の下に立つて序幕を行っているのは高取翁の御令孫高取綾先生（当時五歳）である。

高取翁の銅像は、当初計画されていた「壽像園」ではなく、「西溪公園・にしのだにこうゑん」と名



序幕式の写真

付けられた。大正十一年（一九二二）仲夏 高好翁の書と筆で、カタカナとひらがなのふりがなを付けて、表示板に標してある。

西溪公園

にしのだにこうゑん
大正十一年仲夏 高好書



公園の標柱（前面）



公園の標柱（側面）

この名称は、御構内西の原西の溪（にしのだに）多久弁では（にしのだに）と呼ばれていた。しかし、高取翁の号が西溪（せいけい）だったので、高取さんの号で呼ぶようになったのではと、長年、村立図書館の司書をやっておられた細川章さんが言われた

ことから、今では通称「せいけい公園」と呼ばれている。

高取伊好翁伝（稿本）

私は学生時代に痛めた（右足大腿骨髄炎）の再発で入院をしていた。そこに見舞いに訪れられたのは、当時、佐賀県文化団体協議会副会長の高取綾先生と佐賀市文化連盟事務局長の古館路子さんだった。高取綾先生には大変お世話になり、御尊父伊好翁の事、多久の図書館の建設の事等を尋ねていた。綾先生は、家に遺されていた記録を九州大学石炭研究センターで印刷していただいたので参考になればと抜き刷りの冊子をお見舞いに持って来てくれた。『高取伊好翁伝（稿本）』『高取伊好年譜（写）』など興味深い内容が詰まっていた。

高取伊好翁は、大正八年（一九一九）十二月、「高取鋳業会社及高取合資会社の代表者タルヲ辞シテ事業界ヲ退隠シ鋳業会社ニハ婿高取盛ヲ社長ニ嗣子九郎ヲ副社長ニ合資会社ニハ九郎ヲ社長ニ盛ヲ副社長ニ据エラレタリ。」と記されている。

高取翁 莊田図書館を訪ねる

大正十年（一九二一）初夏、仕事を子供達に譲った高取翁は、詩友の米原耕造（義外）と二人で、五月七日に佐賀駅を発して、九州一巡の旅に出かける。（義外は、元大分県庁に務めていた人物。東原精舎で漢学を学ぶ。初めは相知らず、翁の佐賀の別邸にト居する。一見して旧友の如しと云う。詩酒を持って親しく交際する。翁は詩稿の整理を義外に囑したが、病の為に果たさず。昭和二年（一九二七）一月七日没。と他の書物にある。

高取翁と義外の二人は、「五月十五日午後四時ニ白杵駅着。元井旅館ニ投ス。肝ルニ猶早シ、相携エテ白杵公園ニ遊フ園ハ白杵湾ニ突出セル小半島ニテ西方僅ニ一ヲ通ス。」



荘田図書館



荘田平五郎翁頌徳碑

十六日、町ニ荘田図書館アリ。荘田氏ノ経営ニシテ六間ニ八間半ノ木造ニ階建ナリ、別ニ書庫アリ、其建築ニ式万余円ヲ費セトイフ。荘田氏及稲葉氏ノ蔵書ヲ収メ年々ノ補充費式參百円ナリト。」

と記して、別の項目には、「岩崎一日弟弥太郎、部下川田小一郎、荘田平五郎ノ外ニ翁ヲ伴ヒテ吉原ニ遊ヒ一樓ニ登リシニソレ岩崎ノ旦那ノ御越シナリトテ大ニ款待シタルニ弥之助ト翁ハ碌々酒モ飲マス其処ヲ立去リ弥之助力愚図愚図シテ居ルヲ見捨テ翁ハ一妓ヲ拉シテ此所彼所ト梯子酒ヲ飲ミ廻リ数日ヲ経テ出社セシニ荘田等イフ、高取ハ「エライ奴」ダ、アノ時七八軒飲廻リ是レ見ヨ此通り八拾円許リ勘定



荘田図書館の書庫

ニナツテ居ルト。翁イフ、当時余ハ頗ル酩酊シテ何事モ知ラスト、阿々大笑セシカハ一同氣ヲ吞マレテ共ニ鬨笑セシトゾ。此荘田ハ岩崎ノ秘書兼會計ニテ常ニ手下ケ金庫ヲ持廻リタレハ知人皆呼ンテ彼ヲ小金庫「チンボックス」ト綽名セリ。川田小一郎ハ當時人物トモ思ハレサリキ高島炭鉱力岩崎ニ譲渡サルヤ川田先ツ来リテ炭坑ノ処理ニ着手シ一同ヲ集メテ演説セシカ是迄

後藤ノ雄弁ニ聞キ慣レタル耳ニハ拙劣ニシテ聞クニ堪ヘサリキ其上彼ハ銅臭粉々タリシカ晩年「日本銀行總裁」トナレリ、コレ其修養ノ結果ナリ彼モ亦偉ナル哉云々。」

「岩崎兄弟、川田小一郎、荘田平五郎、と一緒に吉原に遊び」と日記にあるのは、二人の年譜を付き合わせて見れば、「翁ハ、明治九年（一八七六）、翁二十七歳ノ時、高島ニアリ、是ヨリ暇時樓東京ニ遊ビ大隈重信、岩崎弥太郎ノ知遇ヲ受ク。」

「荘田平五郎は、明治八年（一八七五）三菱商会入社。明治十年（一八七七）三十一歳の九月の時に会計局事務長を命ぜられている」ので、明治九年から十年頃ではないかと思われる。

昭和六十二年 白杵への旅

伊好翁の御令孫綾先生より頂いた『高取伊好翁伝』を読んで直ぐに多久の図書館のモデルは大分県白杵市の荘田平五郎氏が作った図書館であると思った。入院中の病院に退院をお願いして、翌日、白杵へ行くことにした。病み上がりの身体を心配して同行してくれた小学校三年生の長女と二人の旅は今になっても強く記憶に残っている。



村立公園の風景



旧村立図書館



旧村立図書館

高速道路もない昭和六十二年（一九八七）の夏、早朝に多久を発って、佐賀、久留米、日田、玖珠、湯布院、別府、大分、臼杵に着いたのはお昼をとつくに廻っていた。臼杵城の麓の図書館と大きな書庫。間違いない。高取伊好翁と米原義外氏が見た図書館に違いないとの確信が得られた。臼杵市には新しい図書館が寄贈されており、荘田平五郎氏が寄贈した建物は歴史民俗資料館として利用されているようだった。その日は休館日だったので帰りを急いだ。帰路は、竹田、九重、小国、日田、久留米、佐賀を通り帰って来た。

大正十一年 花見の宴

高取翁は、郷土の教育、文化の向上や産業発展の

ために多大な寄附を行っておられる。詳細については『高取伊好翁伝』に記載されている。高取翁の徳業に感謝し、それを末永く顕彰するために、村民たちも広く寄付金を集めて、等身大の壽像を建てた。この時の寄付金の詳細については最所和泉氏の複写資料により見ることが可能となった。

高取翁の記録に、大正十年（一九二一）五月十六日、九州巡歴で臼杵を訪れるまでは図書館建築についての記録等は一切無いが、荘田図書館を見てから、荘田のように故郷に図書館を寄贈しようと思いを抱いたのだろう。大正十一年四月十二日、壽像の前で、多久の村民達が翁とその家族を請待して開催された第一回記念会（花見宴）は、村民の誠意より出たる

此の催しを以後毎年必ずこの会を開くことにせり、と喜び。多久村民たちが寄付金を集めて、壽像が建てられた。翁はその村民達の厚意に酬いる為、境内に庭園を作り園内に図書館及公会堂を築きたいと述べられ、そして漢詩一首を作られている。

『壬戌仲春多久村人招余西溪公園開観花宴記喜』

「農耕將近暫休肩 寸観花榮有旃 正是春風駘蕩 日一村携酒醉芳筵」(大正十一年四月、多久の村人たちが、私を招いて、西溪公園に於いて花見の宴を開

いてくれた嬉しくなって次の漢詩を書いた。農繁期ももうすぐ、しばらく肩を休め、僅かの時間を惜しんで、花見を行う旗が上がっている。今日は春風胎蕩の日、村中の人達が酒を携えて公園で楽しんでる。

しかし、翁の壽像は太平洋戦争の末期、昭和二十年(一九四五)五月二十七日、金属回収の為に村民に見送られて出征したまま、帰らぬ人となっている。

壽像の後に聳えていた、元龜元年多久入城の時に龍造寺康房公が植えた下総守の松、筋原驛のホームからも見えたと言われていた大木が、惜しいことに戦後間もなくしてカミナリが落ちて倒れてしまった。途中から割れて倒れていた松は、昭和四〇年頃に根元からチェーンソーで伐採され、残骸は現在も残っている。根株の根回り五メートル五〇センチもある。

高取翁が、大正十一年(一九二二)に多久村に寄贈された、瀟洒な図書館は何の前触れも無く、昭和五十五年(一九八〇)に、取り壊されてしまった。

それから間もなくして公会堂も取り壊しの計画が立てられていると話を聞いた。雨漏りはするし利用者も殆ど無く、僅かに子供達を相手の習字のお稽古場として活用されていただけだったので、当然の計画だったかも知れない。

公会堂の恩人、飯沼二郎先生

しかし、床の間に掛けられた『寒鶯待春』の掛け軸と三枚の扁額。中央に『寒鶯亭』、左右に『額汗而食』、『勞而休』。高取翁の思想、哲学、郷土への限りない愛情が込められているように思われた。

壊してはいけない。どんな事をして、守らなけ

れば、と思っっている時に、昭和五十七年(一九八二)五月七日から二日間、多久に農具の調査に見えたのが、京都大学名誉教授飯沼二郎先生だった。

飯沼先生は、図書館が壊されたことを大変残念がられ、新聞社へ一文を寄せて下さった。昭和五十七年七月二日の朝刊に掲載された『筭(こうがい)をかうために髪の毛を売るな』は、大変な反響を得て市役所へは多くの電話がかかって来たそうである。

市の担当者からは、自分自身に降りかかる火の粉を振り払うかの如く、飯沼先生と私を告訴すると何度も怒られたが、ここを守る為にはこの公園の由来や素晴らしい環境や歴史を多くの心ある人達に知ってもらうことより外にはないと思っ「聖廟のある町づくりの集い」「釈菜記念講演会」「岸川まんじゅうを食べる会」「観月会」日曜日の早朝には、「朝粥会」

「論語の素読」等をこの公会堂で催してきた。もしもの時は、その方々が声をあげてくれるのを信じて。数年後に、雨漏りをしていた屋根が修復され、平成十一年(一九九九)三月十九日には、国登録有形文化財に登録され、平成二十二年度には佐賀県遺産に認定され、今に残っている。

飯沼二郎先生は平成十七年(二〇〇五)十月三十一日にお亡くなりになった。頑固さと素直さ、優しさを合わせ持ったフットワークの軽い紳士だった。飯沼先生に感謝。

【参考資料】

- ・「水江事略」(多久市郷土資料館)
- ・「高取伊好翁伝(稿本)」『石炭研究資料叢書』第五
- 抜冊 一九八四年三月 九州久学石炭研究資料センター
- ・「多坑主壽像園築造記念図書館、公会堂建設ニ関スル往復書類」(最所和泉氏複製資料)

昭和二十年(一九四五)、金属等回収令により高取伊好翁壽像が供出された後は、唐津市の高取邸にあった胸像が据えられていましたが、平成二十三年(二〇一一)に高取伊好翁立像復元委員会が設けられ、市内外の多くの人達の浄財により新たな立像が建てられています。

※脳梗塞三回目を発症してパソコン操作が困難となり設営を孔子の里事務局長亀川将平氏にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。



旧村立公会堂(寒鶯亭)

笄(こうがい)を買うために に髪の毛を売るな

多久の「歴史公園」について

京大名書教授 飯沼 二郎



最近、初めて多久を訪れて、

その文化の香り高い美しい風土に驚いた。周囲を取りまく美しい山々のたなすまいといひ、聖廟(びょう)をほじめとする数々の文化的な遺産といひ、「小京都」と呼ばれるにふさわしい。私たち京都の人間も、京都の文化的風土に誇りをもっているが、多久にも、この地に歴史公園をつくらんとする企てがある。聞いて、まことにまことに思ったのである。

私たち京都の人間は、その文化的風土に誇りをもつが故に、できるだけそれを変えたくないよに心がけている。町名なども平安時代からつづいているものが多く、大切に保存している。かつて、東京あたりからきたお役人が、東京的な考え方から、一丁目、二丁目というように、行政に便利な町名に変更しよう

として、京都市民の猛反対に遭い、ついにはその計画を撤回したことがあった。

町名などでさえそうだから、まして、町並みの保存には、京都市民はきわめて敏感である。新しい高層建築を建てる場合などには、高さや色彩などに厳しい規制がなされている。このような京都市民の愛憎によって、京都の文化的風土は守られているのである。

私は、多久に来て、異様なものが目にとまった。それは、美しい山の一角が切り崩されて、無残に赤土が露出している光景である。聞いてみると、歴史公園に人を誘致するための観光道路を建設中なのだという。京都の人間には、とうてい考えられないことである。京都の美しい東山三十六景の一角を切り崩して赤土にしたら、京都の美しい文化的風土はたちまち破壊されてしまつてあつたらう。私は「笄(こうがい)を

買うために髪の毛を売る」という古いことわざを思い出した。髪の毛を売って、その髪の毛に笄(こうがい)を買うように、せっかくの歴史公園ができなかつきに、肝心の美しい多久の文化的風土は消滅してしまつていゝであらう。

山の本は切つても、また生えるかもしれない。しかし、建物は一度壊したら二度と戻らない。歴史公園に予定されている敷地の一部に、美しい木造家屋が建っているのを見た。聞けば、大正時代に建った公会堂だという。大正時代に、村に、このような公会堂が建つたということでは、ちょっと他のところでは考えられないことであり、今さらのように、多久の文化の深さを思ひしめられたが、それも、歴史公園をつくるために取り壊しの運命にあるのだという。



のだという。大正時代に、村に図書館が建つということはない、実に珍しいことだと思つた。写真で見るとその建物がまた実に美しい。しかし、この図書館は公会堂よりも一足先に、取り壊されたのだという。何となく惜しいことをしたものが、私は悔しきりする思いであつた。しかし、いくら悔しきりしても、なくなつたものは、もう再びは戻らない。せめて、公会堂だけでも残せないか。

ヨーロッパに行つてみると、イタリアでもドイツでも、中世の街が、そっくりそのまま保存され、そこで人々は生活をしていゝ。日本でも、最近やっと歴史的街並みの保存が真剣に考えられ始めている。多久の歴史公園も、現在の建物や自然をそっくりそのまま保存し、たとえ新しい施設を造るにしても、それとの調和を考へるべきである。それでこそ、歴史公園の名に値

しよう。鉄筋コンクリートの建物や道路なら、何も多久に行かなくても、日本中いたるところにある。多久にしかないものがある。多久にしかなくものがあつてこそ、人々は、多久に足を運び、その美しい文化的風土に接して、郷土に対する愛憎に自覚めしめられるのである。

飯沼二郎(いひぬまじろう)
氏 大正七年東京生まれ。昭和十六年三月、京大農学部卒。五十六年三月、京大人文科学研究所教授を定年退職。京大名書教授。専門は農業経済学。主な著書はNHKブックス「日本農業の再発見」、岩波新書「風土と歴史」、筑摩書房「日本の古代農業改革」など。

(佐賀新聞 昭和57年7月2日掲載)

多久家文書

『水江事略』(翻刻文) 紹介 14

公益財団法人孔子の里 理事 服部政昭

水江事略卷之六

安順公譜之上

永祿七年癸亥ヨリ
慶長二年丁酉ニ至ル

文祿二年癸巳

御年三十一歳

正月元日我公文川城ニ在テ御越年此日與力家臣ヲ集メテ御祝有神代家良モ又祝儀トシテ来ル暮二及テ猿楽ヲ興行シ我公家良小田太郎四郎副嶋助五郎及両家ノ臣兼テ此道ニ堪能ナルモノ思ヒ思ヒニ藝ヲ盡シ終夜興ニ乘スト云

同月四日大明ノ軍兵數十萬平安道ニ襲来リ小西行長ノ居城平壤ヲ攻ム行長手ヲ盡シテ防戦フトイヘドモ利アラスシテ味方多ク討レ王城ニ引退ク明軍勝ニ乘シテ追来リ開城府ニ入ル王城ヲ攻落サント議ス王城ニハ備前宰相秀家卿ヲ大将トシテ諸將是ニ會ス秀家卿急使ヲ成鏡道ニ馳セテ直茂公清正ノ両將ヲ招カル是ニ依テ橘州ノ兵ヲ迎ヘ二月中旬安邊城ヲ登シテ王城ニ歸ラル時ニ二十九日ナリ

三月上旬佐嘉衆ノ内松嶋五左衛門カ樸二兵衛ト云モノ朝鮮人ヲ侮リ三尺餘ノ大太刀ヲ拔キ其首ヲ斬ル真似ス朝鮮人忽チ其刀ヲ奪取り却テ二兵衛ヲ伐殺ス時ニ吉岡平左衛門馬上ヨリ鳥銃ヲ以テ是ヲ打倒スサレトモ其モノ暫クシテ起上ラントス爰ニ土橋喜左衛門(始ハ久藏十七歳)駈合セテ其首ヲ得タリ喜左衛門モ痛手ヲ負ヒ數日打臥タリ我公醫師ヲ附置懇ニ保養ヲ加ヘシカ共更ニ其驗ナカレシカハ土橋カ一族片峰甚兵衛外ニ輕卒四人ヲ差副是ヲ多久ニ歸サレタリ土橋深ク此恩ヲ感シ後我公ニ殉死スト云

小侍カ傳ニ云朝鮮人既ニ二兵衛ヲ切殺シ直ニ吉岡ニ立向フ所ヲ小侍弥右衛門鳥銃ヲ放チ是ヲ打倒ス土橋蒐免テ首ヲ取ル

同月相浦左近允カ從者中原藤次兵衛糧ヲ取入レシ為郷内ニ行病氣ニ懸リ歸ルヲ得ス左近是ヲ昇取シ事ヲ請フ我公然ルヘシト勇士五人ヲ差副ラル左近是ヲ率テ其地ニ到リ見レハ中原ハ薩摩ノ兵ト共ニ打卧居タリ左近直ニ中原ヲ昇荷ハセ其所ヲ立退シ跡ニテ異人トモ馳集リ薩ノ病者ヲ切害シ腰刀ヲ奪取其儘左近ヲ追懸シカハ左近及五人ノ勇士代ル代ル鳥銃ヲ放テ異人數十人射殺シ繰引ニシテ歸ル異人トモ猶一里餘リ付慕ヒシカ共仕出ス事モナクシテ立去ルリケル五人ノ内古閑関右衛門異人ノ矢ニ中テ手疵ヲ負ヒシカハ左近急キ其矢ヲ抜捨ヨト申セシカハ古閑カ云異人我疵付ヲ見ハ機ニ乘テ益競来ルヘシト其矢ヲ抜カスシテ鳥銃ヲ放テ去ル千布眼助モ又手痛ク働キント云々

四月仲旬大明ノ沈惟敬ト云者和親ヲ調ヘシカハ諸將王城ヲ去テ軍ヲ善山府釜山浦ニ返ス直茂公殿軍ヲ命セラレ惣勢ニ後レテ王城ヲ登セラル我公モ是ニ從ハル家臣市丸新兵衛急病ニ侵サレ從フ能ハス我公是ヲ聞テ速ク故郷ヲ離レ異国ニ渡リ我ト死生ヲ同フスルモノ皆我手足ニ異ナラス縦令下々ノモノタリ共是ヲ捨殺ニスヘケンヤトテ一日其處ニ御滞留有其御仁惠ノ御心天ニ通シ弓矢神モ争テカ擁護ヲ加ヘサラン病氣忽チ平癒ス翌日はヲ具シテ直茂公ノ御跡ヲ慕ヒ釜山浦ニ着セラル是ヲ聞モノ當家ハ勿論他家ニモ舉テ其仁心ノ深キヲ感シアヘリトソ市丸ハ此御厚恩肝ニ銘シ御卒去ノ時追腹スト云々

五月上旬諸將各兵ヲ引テ釜山浦ニ赴ク路次密陽城ノ近里ニ到テ我公俄ニ御發病ニテ甚腦ミ玉ヘハ與力ノ輩家臣ノ面々大ニ驚キ御輿ヲ要山ニ昇入レ藥ヲ献シ神明ニ祈ルトイエヘトモ一圓其驗モナカリシカハ人々色ヲ失ヒ心魂ヲ腦シケリ暫アリテ僅ニ御快クマシマシケレハ衆皆悦ヒノ眉

ヲ開キ要山ヲ登シテ海邊ニ到ル直茂公ヨリモ御典医ヲ相付ラレ船ヨリ釜山浦ニ御着猶又御療養有テ頓テ御本復ナリ直茂公ハ密陽ヨリ蔚山ニ到リ其後西生浦ニ移ラル我公ノ兵モ大半ハ是ニ属ス

長信公ハ梶峰城ニ在テ公御病氣ノ由ヲ聞召サレ直茂公ヘ御禮ノ為御使ヲ朝鮮ニ遣ハサレ御書ヲ差上ラル文ニ云

一 先之御返書御懇辱候殊

一 御長陣左右ニ承候事實ニ候哉去様体次而之時ハ可被仰知候事

一 今六郎次郎曲煩申候處被入御念名醫被相副其故ニ無程快氣申候由承及候誠ニ御憑事兼日之首尾顯然

銘肝餘身忝候而難述筆紙候事

一 ケ様之病者兼日在所ニ罷居候而之向年遠八然々本身ニ難成物ニ而不養生仕徒二身を捨候ハ而御用ニ立候様御指南奉願候事

一 自前ニ如申候大小共二手を取候而御指南之處千々萬々頼入候事天山申度事多々候得共難尽筆紙候保

令省略尚餘ハ口上ニ 恐々謹言

七月廿九日 天理 判

鍋嶋加賀守殿 采御宿処

直茂公是ヲ御被見成サレ其後御保養ヲ勸メ玉ハシ

ン為此御状ヲ其俣我公ニ贈ラル故ニ此御状今ニ御家ニ傳ハル

六月仲旬太閤殿下ノ御下知ニ依テ諸將兵ヲ集テ

晋州牧司カ城ヲ攻ム其兵都合六萬餘毛利秀元卿

浮田秀家卿東西ノ主將タリ直茂公ハ西生浦ヨリ

我公ハ釜山浦ヨリ登シテ晋州ニ到リ東ノ手ヨリ

城中ニ攻入ラル此時我公ノ旗奉行原千右衛門馬

二鞭打テ沼ヲ渡リ一番ニ旗ヲ城中ニ差入ル指手

東原金治矢ニ中テ死ス千右衛門モ又疵ヲ被ル梶

原喜兵衛河原空之助江副次郎兵衛公文八左衛門

ヲ開キ要山ヲ登シテ海邊ニ到ル直茂公ヨリモ御典医ヲ相付ラレ船ヨリ釜山浦ニ御着猶又御療養有テ頓テ御本復ナリ直茂公ハ密陽ヨリ蔚山ニ到リ其後西生浦ニ移ラル我公ノ兵モ大半ハ是ニ属ス

各城中二乗入敵ヲ討テ功ヲ顯ハス龍造寺久重カ
從士大河内五右衛門以下討死十餘人敵ノ大将牧
司ヲハ秀家卿ノ家臣是ヲ討取城兵死スル者二万
五千餘人ト云々日本ノ諸將凱歌ヲ發シ慶尚道ニ
歸テ各城壘ヲ守ル直茂公ハ竹嶋ノ二城ヲ守ラル

同三年甲午 御年三十二歳

正月下旬殿下ノ命ニ依テ釜山浦及名護屋在陣ノ
諸將各伏見ニ會ス直茂公清正行長長政等ハ猶釜
山浦ニ留テ諸城ヲ守ル

六月上旬我先鋒徳永八郎左衛門カ組ノモノト直
茂公ノ臣ト爭論ヲ仕出シ當手ノモノ甚狼藉ナリ
シカハ直茂公大ニ御立腹有我公是ヲ聞召サレ頭

立モノ一人ノ首ヲ刎テ御憤リヲ宥メラレント思
召トモ元ヨリ張本ノモノナシ止事ヲ得ス其組五
十人闖ヲ取ラシムルヨリ外ナシト決スル時服部

權次兵衛進ミ出テ曰闖ヲ取テ死スルハ言甲斐ナ
キワザナラズヤ某物代トシテ切腹仕ランイザ首
ヲ刎テ御断仰上ラレト申上シカハ我公大ニ其

勇決ヲ感セラレシカ共御所存有テイヤ其方死ス
ルニ及ハストテ服部ヲ除キ其餘ノ者ヲシテ闖ヲ
取ラシム時二石丸九郎右衛門闖ニ當ル我公彼ヲ

惜ムノ御決心有又闖ヲ取ラシムルニ三度迄石丸
當ル今ハ遁ル所ナク死ニ決セシカバ我公御歎息
有テ天命ノ然ラシムル所今ハ詮方ナシ我汝カ此

度ノ忠功忘レ置ス汝カ子孫ニ報スヘシ其證ニト
御手自ラ御墨付ヲ賜ハス石丸ハ是ヲ頂戴シ衆ニ
向テ曰君ノ御用ニ立テ一命ヲ捨ルハ元ヨリ武士

タル者ノ本意ナリ然ルニ某如キカ一命ヲ捨レバ
トテ斯ク有難キ仰ヲ蒙ルノミカ御墨付迄モ下シ
置ル、条生前ノ面目武士ノ冥加何事カ是ニ如シ

各是ヲ予カ子共ニ傳ヘ玉ハレカシト御墨付ヲ渡
シ打笑テ切腹ス見ル者御主從ノ御恩義ヲ感シ涙
ヲ流サヌ人モナシ我公則御使ヲ以テ石丸カ首ヲ

差上ラル直茂公是ヲ獄門ニ掛ラレ足輕二人ヲシ
テ嚴敷是ヲ守ラセラル時ニ服部傍輩等ヲ招テ忠
死ノ石丸カ首獄門ニ晒サレテハ何ノ面目カアラ

ン是我等カ心ニ有ト或夜深更ニ及ヒ石丸カ首ヲ
盜取テ人シラヌ土中ニ埋メタリ直茂公大ニ怒ラ
セ玉ヒ番兵二人カ首ヲ刎ラレ獄門ニ掛ラレタリ
服部ハ内蔵允ト名ヲ改ム今當家ニ石丸服部ト称
スルモノ皆此子孫ナリ

服部カ傳ニ云權次兵衛カ父佐渡昔日肥後陣ノ
砌二羽ノ鳥各一ツヲクハエ来テ佐渡カ前ニ落

ス佐渡則是ヲ神体ニ崇メ是ヲ權次ニ傳フ我公
御出陣ノ日はヲ御借用成サレ朝鮮ニ御持越サ
レ御歸陣ノ後又内蔵允ニ返シ賜ル陰神陽神ト

崇メテ服部カ家ニ傳フト云

同四年乙未 御年三十三歳

今年公猶竹嶋ノ城下ニ御滞留有先鋒峰權左衛門
ハ弓ノ卒五十人ノ物頭ナリ時ニ弟宗七軍法ヲ侵

ス我公是ヲ誅セラレン為宗七ヲ兄權左衛門ニ下
サル然ルニ權左衛門所存有テ是ヲ殺サスシテ潛

ニ多久ニ送り遣ハス公是ヲ怒リ權左衛門ニ牢人
ヲ申付ラレ其組ヲ梶原喜兵衛ニ附セラル梶原頃

日戰功有シ故ナリ
或説ニ云宗七制法ヲ背ニ依テ兄權左衛門勸氣
ヲ蒙リシハ中朝鮮ノ時ナリト

慶長元年丙申 御年三十四歳

六月明使沈惟敬等来朝ス加藤清正小西行長同歸
朝ス然レ共直茂公ハ竹嶋城ニ御滞陣ナリ

我公以下衆軍大半ハ御暇ヲ得テ歸陣ス當家ニ於
テ中歸陣ト称スル是ナリ

九月殿下命有テ直茂公ヲ朝鮮ヨリ召サル大坂ニ
於テ台命ヲ陽泰夫人ニ傳ヘラル是ニ依テ御代リ

トシテ世子信濃守勝茂公(御年十七)初テ朝鮮
ニ赴カル同月御發船此比歸朝ノ諸軍多ク是ニ從

フ我公モ又是ニ從ハル
十二月朔日多久城ヲ御發馬有同五日伊萬里津ヨ

リ纜ヲ解カル相從フ輩ニハ木下久兵衛(旗奉行)
徳永八郎左衛門田代二郎左衛門原千右衛門(以
上三人鉄砲物頭)成富權右衛門梶原喜兵衛西岡

覺右衛門(以上三人弓物頭)其他與力家臣付從
フ前役ノ如シ今年冬大明ト和堤破レ殿下加藤小
西ヲ始メ諸將ヲシテ再ヒ朝鮮ニ渡海セシム

同二年丁酉 御年三十五歳

正月清正行長等再ヒ朝鮮ニ渡海セラル
殿下令ヲ出シテ曰先陣ハ前役ノ如ク清正行長隔

日ニ是ヲ勤ムヘシ非番ノ日ハ二陣タルヘシ三陣
ハ黒田四陣ハ鍋嶋五陣ハ嶋津六陣ハ長曾我部池

田藤堂加藤嘉明中川七陣ハ生駒蜂須賀八陣ハ秀
家九陣ハ安藝宰相秀元ナリ其兵都合十三萬餘騎

ナリ直茂公勝茂公ニハ元ヨリ竹嶋ノ二城ヲ守ラ
ル我公是ニ從ハル

三月直茂公殿下ノ召ニ依リ御歸陣直ニ大坂ニ御
登リ玉造ノ御屋鋪ニ入ラセラル

四月六日殿下ニ御謁見有御太刀衣服ヲ賜ハル五
月九日又殿下ヲ御屋鋪ニ請セラル此節籐八郎君

モ殿下ニ謁見セラル同十一日殿下再ヒ直茂公ヲ
召サレ饗應ヲ賜ハル又白銀三百枚ヲ拝領セラル

此時直茂公毛利輝元卿ノ息女ヲ以テ高房公ノ室
トセラレン事ヲ請ハル殿下其通然ルヘシト仰出

サル六月殿下直茂公ニ仰有テ蜂須賀阿波守安國
寺惠瑗ト三奉行トシテ朝鮮ニ御渡海有

十一月公ノ御嫡子慶法師丸(年十三)加冠ヲ直
茂公ニ請ハル孫四郎茂富ト号セラル孫四郎ハ直

茂公ノ御幼名ナルニ依テ是ヲ賜フ所ナリ其御状
ニ云

慶法師假名之事依望被任孫四郎候追而藤八
殿(可申候也)
慶長二年十一月廿八日
鍋嶋加賀守直茂
龍造寺孫四郎殿

(以下 次号に続く)

華表を仰ぐ

多久市郷土資料館長 藤井 伸幸

第三回 東多久町別府八幡神社の鳥居

〔乾坤配徳 日月同光〕

別府八幡神社は、多久市東多久町を東西に走る国道203号からJR東多久駅方向へ、約100m北に進んだ道路西側に位置しています。

『丹邱邑誌』(多久の儒学者深江順房が江戸後期に執筆編集した多久の地誌)によれば、「別府正八幡宮(応神天皇神功皇后武内宿禰ヲ祀り奉ル)別府駅南ニ在リ：神門二基(内一ノ神門木也石神門ハ玄山府君御建立)宮司役氏圓藏坊：肥前鎮守ノ祠ト云伝フ：大永中剛忠府君：荒平山ニ宮殿ヲ建テ玉フ 天理府君志ヲ継玉ヒ崇敬尤大也 然トモ荒平山ノ嶮ヲ厭ヒ 永禄中今ノ地ニ遷座シ奉リ玉ヘリ 其跡ヲ八幡場ト云」とあります。

これによれば、別府正八幡宮には応神天皇、神功皇后、武内宿禰を祀っています。別府駅の南にあり、神門(鳥居)二基(内一基は木製で、石製の鳥居は玄山府君多久茂矩公が建立されました。)宮司役は圓藏坊で、肥前鎮守の祠堂と伝わります。大永年間(1521~28)に剛忠府君(龍造寺家兼)が荒平山に神殿を建てられました。天理府君(龍造寺長信)は志を受け継がれ大いに崇敬されました。しかし、荒平山は険しい所なので、永禄年中(1558~1570)に現在の地に遷座されました。その旧跡を八幡場と言います。

なお、多久市史によれば、現在地へは明治十四年に遷座されています。

(正面右の柱に刻まれた銘文)

西海道肥前州小城縣別府奉祠

大菩薩華表

乾坤配徳

威力均顯

士民稽首

日月同光

靈感無方

時薦饒香

洪護家園

永鎮斯地

新立華表

爲法金湯

殷降百祥

誠意維將



別府八幡宮鳥居

嘉敷不朽 穫福向量 聊紀盛事 以題數行
滋扇敦化 里閭靖康

延寶元載次癸丑黃鐘吉旦 朝日頭陀翠峯明覺謹題

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

西海道肥前州小城縣別府において大菩薩華表を奉祠す
乾坤は徳を配し 日月は光を同じくす
洪いに家國を護り 法を金湯と爲す
威力は均顯わることがよく 靈感は無方のごとし
斯の地を永鎮し 百祥を殷降す
士民は稽首し 時に饒香を薦む
新たに華表を立て 誠意は維れ將く
嘉敷は不朽 穫福は向量
聊か盛事を紀し 以て數行を題す
滋扇は敦化し 里閭は靖康なり
時に

延寶元 載次癸丑 黃鐘吉旦 朝日頭陀翠峯明覺が謹んで題す

現代語訳の案は次のとおりです。

西海道肥前州小城縣別府で、大菩薩華表(鳥居)を祀り奉ります。
天地は徳を配慮し、日月は光を等しくします。大いに郷と國を護り、法(すべての存在・事象)を金湯(堅固なもの)とします。神の威力は塵が目に見えて現れるようで、靈感(神の感応)は方向無く広がります。この地をとしえに鎮め、多くの瑞祥を盛んにもたらします。

人々は頭を地に付けて礼をし、ここに芳しい香を捧げます。新たに華表を建立し、神への誠意が助けます。嘉慶と功勳は朽ちず、得られる幸福は限りにまで向かいます。いささか目出たいことを書き記し、もって數行を題辞とします。潤いのある扇は人々を教え導き、村落は平穩で安泰です。

時に、延寶元(1673)年、載次は歳次と同じく干支の頭に付け、癸丑(みずのと)し、旧曆十一月吉日、朝日頭陀(ずだ鉢鉢僧)翠峯明覺が謹んでここに題します。

朝日頭陀翠峯明覺について、牛津町両新村にある寛文十一(1671)年銘の鳥居には朝日沙門翠峯明覺と刻まれ、同一人物と考えられます。別府と両新村にある鳥居の建立者は同じ多久茂矩、建立年は二年差で型式も類似しています。

(正面左の柱に刻まれた銘文)

多久長門藤原茂矩

多久出雲藤原

奉行

多久兵部辰俊

多久助之進政武

多久市之允成明

宮司

圓藏坊増勝

石工武富清兵衛清永

平河藤次左衛門信房

(寄進者の)長門藤原茂矩は多久三代領主、出雲藤原は後の四代領主多久茂文です。上述の『丹邱邑誌』に石鳥居は多久茂矩公が建立したとあり、両者の記載は一致しています。奉行の多久兵部辰俊は初代領主多久安順の子孫、多久團右衛門英明は多久采女佑正周(順純)の子孫、多久助之進政武は詳細不明、多久市之允成明は多久市佑成明と同一人物であれば藤原貴明の子孫です(注)。宮司圓藏坊増勝は、上述の『丹邱邑誌』に宮司役氏は圓藏坊とあり、両者の記載は一致しています。増勝の詳細は不明です。石工の武富清兵衛清永と平河藤次左衛門信房について、多久領では武富氏と平河(川)氏は、石工名としてよく見られますが、この両名を記載した他の事例は現時点でありません。

ところで、領主名、奉行・宮司名、石工名は柱上の異なる高さに刻まれています。領主名の最後の文字より下に奉行・宮司名が刻まれ、奉行・宮司名の最後の文字より下に石工名が刻まれています。このような例は他の鳥居にも見られ、上下関係を意識して刻まれたことが窺われます。なお、鳥居の額東には八幡宮と刻まれています。

(注)郷土資料館所蔵の「多久諸家系図」によります。

来訪・来信・雑録

- 4月12日 春季秋葉学校関係者事前練習
- 4月15日 春季秋葉総練習
- 4月17日 孔子第79代嫡孫孔垂長氏来訪歓迎レセプション
- 4月18日 令和6年春季秋葉
- 5月7日 公益財団法人孔子の里理事会
- 5月16日 施泳中華人民共和国駐日本国公使、楊慶東駐福岡総領事ほか来訪
- 5月23日 有田町同朋保育園論語素読会
- 5月29日 公益財団法人孔子の里定時評議員会
- 6月1日 鶴山塾「古文書教室①」
- 6月4日 (講師：舌間輝吉 多久古文書の村)
- 6月6日 鶴山塾「中国古典の扉①」
- 6月6日 (講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 6月6日 鶴山塾「たのしい短歌①」
- 6月13日 (講師：角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 6月13日 公益財団法人孔子の里職員研修「莊田平五郎記念子ども図書館(大分県臼杵市)」
- 6月19日 ゆい工房「本格蕎麦打ち(前期)」
- 6月19日 (講師：岸川和則 塩田津ソバの会)
- 6月22日 孔子の里ジュニアガイド第20期生入学
- 6月25日 公益財団法人孔子の里評議員選定委員会
- 6月29日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
- 7月2日 『新たに見つかった石井鶴山作品、その他について』
- 7月2日 (講師：中尾健一郎 熊本大学大学院教授)
- 7月2日 鶴山塾「中国古典の扉②」
- 7月3日 (講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 7月3日 多久「孔子の里」芸能保存会代表者会議
- 7月4日 鶴山塾「たのしい短歌②」
- 7月6日 (講師：角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 7月6日 鶴山塾「古文書教室②」
- 7月18日 (講師：舌間輝吉 多久古文書の村)
- 7月18日 ゆい工房「あんこのお花で、美しいおほぎをつくりましょう」
- 7月24日 (講師：林真由美 和なはアートフード協会認定講師)
- 7月24日 東原座舎消防訓練
- 7月27日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
- 7月27日 『江戸時代、多久のやまもの生産』
- 8月1日 (講師：大橋康二 佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問)
- 8月1日 鶴山塾「たのしい短歌③」
- 8月3日 (講師：角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 8月3日 多久「孔子の里」芸能保存会総会
- 8月3日 鶴山塾「古文書教室③」
- 8月3日 (講師：舌間輝吉 多久古文書の村)

8月6日

鶴山塾「中国古典の扉③」

8月24日

孔子の里ジュニアガイド20周年記念イベント

9月5日

ゆい工房「おいしい薬膳茶」二十四節気を楽しもう」

9月7日

鶴山塾「たのしい短歌④」

9月10日

鶴山塾「中国古典の扉④」

9月19、21日

通学合宿

9月25日

令和6年秋季秋葉委員会

9月28日

鶴山塾「古文書教室⑤」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

9月28日

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

編集後記

莊田平五郎記念子ども図書館を訪問

6月13日、大分県臼杵市にある『莊田平五郎記念子ども図書館』を、服部政昭理事や事務局職員とともに訪問しました。莊田平五郎氏は、豊後臼杵藩(現在の臼杵市)出身の実業家。三菱財閥の一番頭として創業者岩崎彌太郎氏らに仕え、明治・大正期の日本経済の近代化に大きく貢献された人物です。今回訪問した図書館は、莊田氏が私費を投じて建設し、大正七年(一九一八)に臼杵図書館として開館されたものです。当時の建物は大切に保存され、現在はこちらも図書館として活用されています。莊田氏が「臼杵の青少年が読書を通じ知識や見識を高め、心豊かに育ってほしい」と願い建設し、現在もその想いは受け継がれています。

高取伊好翁は、大正十年(一九二二)、九州巡遊の旅でこの図書館を訪れています。旧知の仲であった莊田氏と会い、図書館の建設費や運営費等について尋ねています。多久村立図書館の開館は大正十三年(一九二四)。建築様式や高取翁の多久村への寄付の状況を考えると、莊田氏の想いやこの図書館を参考に、すぐさま建設に取りかかったと思われまます。

成功した実業家の二人が、郷土の将来や発展に向け、その熱い想いを交し合った一コマが想像される訪問でした。(ほ)

訃報



せとぐち ろくろう 瀬戸口 六良 氏

多久市北多久町

大正15年(1926) 7月14日生

令和6年(2024) 7月8日逝去 (97歳)

昭和26年(1951) 11月1日 北多久町公民館勤務
 昭和29年(1954) 5月1日 1町4村合併で多久市誕生
 多久市発足後も、長年、国重要文化財多久聖廟や秋葉の業務に関わる。
 昭和30年(1955) 4月1日から11月30日までは多久市立図書館勤務
 昭和57年(1982) 12月31日 多久市役所退職
 昭和40年(1965) 頃から平成21年(2009) 春まで、多久聖廟秋葉の執事者を務められる。この間には賛者も務められている。



孔子の里ジュニアガイド20周年記念イベント



令和6年8月24日、東原庁舎講堂において、孔子の里ジュニアガイド20周年記念イベントを開催しました。孔子の里ジュニアガイドは、多久聖廟を訪れる観光客に、多久聖廟やその歴史、敷地内の孔子像や石碑、漢詩碑をボランティアガイドする小中学生です。平成17年6月からガイド生の募集を開始し、10月からガイド活動を始めています。これまでに活動に参加したガイド生は130名、第1期生はすでに30歳代となっています。

今回の記念イベントは、結成20周年を記念し、これまで活動に参加、協力いただいた方々へ感謝の気持ちを表すとともに、多くの皆さんにジュニアガイドの活動を伝え、理解を深めていただくために開催しました。



現役ガイド生がおもてなし

記念イベントには、卒業生7名と現役ガイド生11名、旧指導者3名、現指導者4名、保護者や関係者など、計43名に参加いただきました。

記念イベントでは、式典、現役ジュニアガイド生による多久聖廟案内、世代を超えた交流会を開催しました。司会進行や参加者のおもてなしは、現役ジュニアガイド生が担ってくれました。イベントの最後に、サガテレビ「かちかちLEEVE」でも有名なメロンパンカメラさんの指導による記念品づくり(女山大根のキーホルダーづくり)を参加者全員で行いました。

ガイド活動を通して

孔子の里ジュニアガイドは、地域活動への参加や様々な体験を通して、子どもたちの自信や自立心の成長、人を敬ぶ心やふるさとを愛する心を育むことを目的に始められました。その活動は受け継がれ、ずっとと継続されていると感じています。子どもたちは、入学3ヶ月は、難しい言葉が並ぶ「教本(テキスト)」の暗記から始まります。ガイドをするようになると、思うように説明できなくても、聞いてもらえなくてもへこたれない精神力を養ったり、熱心に聞いてもらえた時の喜

びや満足感を味わったりしています。子どもたち同士の教え合いや、意見交換、創意工夫も日々見られます。

毎回感動

子どもたちの活動を見ていての一番の感動は、多久茂文公の文廟記の一説「敬は一心の主宰、万事の根本にして、而して万世聖学の基本たり」のくだりや草場佩川先生の漢詩碑「山行同志に示す」の詩文をすらすらと、嬉しそうに語る姿です。毎回、感動を覚えます。

感謝と継続

このジュニアガイドの活動を始めていただいた第2代東原庁舎学長の林口彰先生は「ジュニアガイド生は、将来、地元に残れば地域のリーダーとして、県外に出れば多久の魅力を広める広報マンとして活躍してくれるでしょう。」と語られていました。

多久聖廟の春と秋の稲葉は、創建当初から316年変わることなく継続されています。稲葉に倣って、子どもたちと共にジュニアガイド活動の継続に努めてまいります。これからも、皆様のご支援を賜ることができましたら幸いです。



孔子の里ジュニアガイドの問い合わせ
孔子の里事務局 ☎0952(75)5112